

Y4-13

相互作用回避のための取り組み - ワルファリン服用患者の食事オーダーとの連携 -

京都第二赤十字病院 薬剤部
大塚 充、澤田 真嗣、堀内あす香、
神田英一郎、小西 偉雄、三上 正

【背景】ワルファリンは本邦において頻用されてきた薬剤の一つであるが、多くの医薬品、食品と相互作用を示すことが知られている。食品の中では納豆との相互作用がよく知られており、薬剤師による服薬指導の際には必ず、納豆を摂取しないよう指導を行っている。しかし、ワルファリン服用中の入院患者に対し、病院食として納豆が配膳されている現状があった。そこで今回、ワルファリン服用患者に対する食事オーダー「納豆禁」の指示漏れの実態と、その改善に向けた取り組みを行ったので報告する。

【方法】平成23年4月、5月においてワルファリン服用中の当院入院患者のうち、入院食として納豆が配膳される可能性のある患者の調査を行った。なお、当院では毎週土曜日の朝食に納豆が配膳される。

【結果】期間中におけるワルファリン服用患者は110名であった。ワルファリン服用中にも関わらず、納豆が配膳される可能性があった患者は9名であった。これらの患者に対しては薬剤師が病棟へ連絡を行い「納豆禁」指示を加えた。

【考察】今回の調査でワルファリン服用患者の約1割に納豆が配膳される可能性があることが判明した。納豆に含まれる納豆菌によるワルファリンの薬効減弱は、72時間程度持続し、その間はワルファリンを服用してもトロンボテスト値が高値を示すことが報告されている。このことより、ワルファリン服用患者の納豆摂取はリスクが大きいと考えられる。ワルファリンをはじめとして、食品と相互作用を示す医薬品は多く存在する。医療安全の観点から薬剤師が積極的に食事オーダーに関与する必要性が示唆された。また、病院食の運用においてもワルファリンの処方時に自動的に「納豆禁」指示を加えるシステムを構築することも有用であると考えられる。

Y4-14

浦河赤十字病院を支えられるか？
大学病院・地域中核病院循環型医師出向制度

浦河赤十字病院 外科¹⁾、
北海道大学病院 第二外科²⁾、
北海道大学病院 地域医療指導医支援センター³⁾
村上 壮一^{1,2)}、大柏 秀樹¹⁾、武岡 哲良¹⁾、
藤森 研司³⁾

都市への医師偏在による地域の医師不足は深刻であり、広大な医療圏を抱える北海道においても例外ではない。指導医たるべき中堅医師は例外なく日常診療に追われ、研修医の指導に必要な知識や技術のアップデートを行うことが出来ず、「最新の知識と技術」を熱望する研修医は地域での研修を望まず、これがさらに地域の医師不足に拍車をかけるという悪循環に陥っている。北海道大学（以下北大）病院では地域医療再生を目的として、平成20年度より医療人養成・地域医療支援プロジェクトを立ち上げた。臨床指導医養成プロジェクトはその一環であり、卒業後10年目以上の医師を対象としている。最初の1年目に北大病院で「最新の知識と技術」を備えた指導医として養成される。2～3年目は、北海道内の地域中核病院29施設のいずれかに出向し、研修医指導に当たる。この期間は助教等北大病院の身分が保障され、多様なフォローがなされる（3年コース）。さらに平成22年度より始まった大学病院・地域中核病院循環型医師出向制度（5年コース）では、4～5年目に再び北大病院に戻り、さらなるキャリアアップを目指す。浦河赤十字病院は病床数278床の地域中核病院であり、常勤医師18名と大学等からの派遣医で運営されている。北大病院の臨床研修協力病院でもあるが、当院での研修を希望する研修医がいないため、地域医療研修として足利赤十字病院および武蔵野赤十字病院より1カ月交代で派遣される研修医が1名いるのみである。浦河赤十字病院を「研修医から選ばれる病院」とすべく、本年より5年コースの大学病院・地域中核病院循環型医師出向制度より1名の医師が派遣された。当院の現在の問題点、今後の改善点等を考察する。